

福島県郷土資料情報

No.59 2019. 2

編集・発行：福島県立図書館

〒960-8003 福島市森合字西養山1

Tel 024-535-3218

Fax 024-536-4787

<http://www.library.fks.ed.jp/>



～当館所蔵『朝河貫一資料』より～

目 次

「朝河貫一没後 70 年記念事業」実施報告	1～2
福島県立図書館所蔵「朝河貫一資料」の世界 ～企画展「海を渡ったサムライ～朝河貫一没後 70 年記念展」より～	3～4
平成 30 年度「ふくしまを知る連続講座」報告	5～6
貴重郷土資料探照 19「明治五年飯坂湯野十綱渡架橋発起記録」	7～9
福島県関係書誌の紹介 2018	10～15

「朝河貫一没後70年記念事業」実施報告

今年度「ふくしまの未来をひらく図書館事業」として没後70年を迎えた本県出身の国際的歴史学者朝河貫一博士の偉大な功績を周知するため、下記の事業を実施した。

1 当館ホームページ「郷土の偉人・朝河貫一没後70年」の開設

開設日：平成30年4月27日（金）～

内容：①人物紹介

②年譜

③特殊コレクション「朝河貫一資料」の紹介
及び目録の公開



2 企画展「海を渡ったサムライ～朝河貫一没後70年記念展」の開催

(1) 概要



当館所蔵の「朝河貫一資料」の書簡や著作等を中心に、53点を展示

朝河博士の生涯を辿り、大隈重信、伊藤博文、野口英世ら著名な人々との交流を中心に書簡や人物紹介を展示したほか、「昭和天皇宛大統領親書草案」や「朝河をいろうった女性たち」のテーマで展示を行った。企画全体に関して、甚野尚志氏（早稲田大学文学学術院教授）の監修をいただいた。

(2) 開催期間

平成30年6月8日（金）～9月5日（水）77日間

（前期：6月8日（金）～7月16日（月） 後期：7月18日（水）～9月5日（水））

(3) 来館状況

入館者数 55,143名（1日平均716名）

(4) オープニングセレモニーの実施

開催日・会場：平成30年6月8日（金）11:00～
エントランスホール

出席者：朝河貫一博士顕彰協会 代表理事 矢吹晋氏
（横浜市立大学名誉教授）

朝河貫一博士顕彰協会 事務局長 糠澤修一氏
（福島テレビ代表取締役会長）

早稲田大学文学学術院教授 甚野尚志氏

福島県教育長 鈴木淳一

等 21名



*セレモニー後、甚野尚志氏による展示資料の説明

(5) 図書館員によるギャラリートーク

担当職員による展示資料解説を実施

開催日：6月9日（土） 7月22日（日） 8月5日（日）

参加者：3回合計 66名

3 記念講演「ふくしまから世界へ～国際人・朝河貫一の歩み～」

(1) 概要

早稲田大学文学学術院教授 甚野尚志氏を講師に招き、当館講堂にて記念講演を開催。朝河の生涯や比較法制史の研究に加え、「昭和天皇宛大統領親書草案」に代表される日米平和のための尽力などの偉大な功績について、豊富な写真や図を用いながらご講演いただいた。

当初の見込みを大幅に超える参加があり、関心の高さが感じられた。

(2) 開催日時 平成30年6月9日（土）14：25 ～ 15：15

(3) 参加者数 168名



(4) 参加者のアンケートから

- ・朝河博士の名前は知っていたが、具体的な功績とその内容については分からず、今回の講座で理解できた。
- ・朝河博士の余り知られていない部分が数多く登場し、博士の人柄がよくわかった。
- ・歴史の真実の一部を理解できた。



4 『朝河貫一資料目録』改訂版の発行及び刊行記念講演会の開催

(1) 『朝河貫一資料目録』（福島県立図書館/編刊 1992）を改訂

甚野尚志氏の協力を仰ぎ、書簡内容の解説や書簡を交わした人物の説明等を加え大幅に改訂し、より充実した内容とした。県内の図書館や関係機関に配布した。

刊行日：平成31年1月18日

発行部数：300部

(2) 甚野氏による「刊行記念講演会」を開催

期日：2月23日（土）14：00～15：30

演題：「書簡からみた朝河貫一の歩み」

参加者：82名



(地域資料チーム)

福島県立図書館所蔵「朝河貫一資料」の世界

～企画展「海を渡ったサムライ～朝河貫一没後 70 年記念展」より～

福島県出身の国際的歴史学者、朝河貫一（1873-1948）。彼は日本や欧米の有力者・知識人と交流し、その記録として膨大な数の書簡・日記を遺しました。その内容は学術的な内容からプライベートな報告までとさまざまですが、一流の歴史学者にして近代日本でも屈指の国際人であった朝河の歩みを一步一步感じることができる資料です。

今回は、当館で平成 30 年 6～9 月にかけて実施した「海を渡ったサムライ～朝河貫一没後 70 年記念展」の展示資料より、書簡を 5 点ご紹介します。



朝河貫一(1873-1948)

1. 1894 (明治 27) 年 10 月 28 日, 朝河 ⇒ わたなべくまのすけ 渡辺熊之助

「請ふ此書を取て万人に示せ。生一の恥づべきなし」

当時、東京専門大学（現在の早稲田大学）に学んでいた朝河が、郷里の友人渡辺熊之助へ送った書簡です。抜群の成績を誇り、更なる勉学のためにアメリカへの留学を志していた朝河でしたが、渡米には多額の費用が必要でした。学費にすら困っていた朝河は、知人らへの借金を要請します。借金の書簡といえどその内容は卑屈なものではなく、自らの大望を滔々と説き、一片の卑劣もないことを堂々と伝えています。

最終的に、朝河は大隈重信・徳富蘇峰・勝海舟らの援助を受け渡米。1896（明治 29）年、ニューハンプシャー州・ハノーヴァー市のダートマス大学へ編入します。

2. 1900 (明治 33) 年 7 月 13 日, 朝河 ⇒ マーガレット ダイモンド Margaret Dimond

“My work in the Library is very quiet and is rather hard brain-work.”

（私が行っている図書館の仕事はとても静かな作業ですが、かなり頭を使う仕事です）

無事アメリカでの大学生活を始めた朝河。ダートマス大学学長ウィリアム・J・タッカーの厚意により授業料と寄宿代は免除されていましたが、個人的な支出は自分で賄わなければならず、図書館でのアルバイトの他、レストランのウェイター等をして生活していました。

マーガレットは朝河よりもかなり年上の文通相手で、111 通もの書簡が残っています。日々の暮らしの様子や友人関係、学問や日露戦争との関わり等が記されており、朝河のダートマス大学及びイエール大学大学院時代を知ることのできる貴重な資料となっています。

3. 1915 (大正4) 年4月4日, 朝河 ⇒ ^{おおくましげのぶ}大隈重信

「此要求に対する史的事情が説明せられ居らざる為に、其の或点につきては、日本の要求が殆ど独逸的に専断なり不当也と思う人士少なからず候」



大隈重信(1838-1922)

名門イェール大学の講師となった朝河より、当時内閣総理大臣であった大隈に対して送られた書簡です。朝河は1909(明治42)年に著書『日本の禍機』を日本で出版するなど、日本の東アジア外交における自制を促していました。この書簡では大隈内閣が1915(大正4)年に中国へ「21カ条の要求」を突きつけたことに対して、大戦の敗戦国であるドイツを引き合いに出し、強く非難しています。朝河の日本外交への憂慮はこの後も尽きることなく続くこととなります。

4. 関東大震災発生にあたり日本から届いた書簡

つほうちしょうよう よしのさくぞう わだまんきち
坪内逍遙, 吉野作造, 和田萬吉 ⇒ 朝河

1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災は東京・神奈川を中心とする広範囲に被害を及ぼし、母校の早稲田大学や帰国の際に研究拠点とした東京帝国大学(現在の東京大学)も大きな被害を受けました。遠くアメリカの朝河へも早稲田大学の恩師である坪内、「大正デモクラシー」の立役者である吉野から被害状況の知らせがありました。さらに東京帝国大学図書館長・和田からは図書寄贈等に関する支援要請があり、アメリカ議会図書館へ支援を依頼しています。

5. 1933(昭和8)年9月16日, 朝河 ⇒ ^{とくとみそほう}徳富蘇峰

「武具なき人を殺害するものを以てその主義が忠誠なる故にゆるすべしと申すの類、日本の武士道にあるまじき卑劣のことと申すべき候」



徳富蘇峰(1863-1957)

『国民之友』『国民新聞』を主宰し、近代日本を代表するオピニオンリーダーとして活躍したジャーナリストである蘇峰。朝河とは青年時代から親交があり、渡米後も書簡を交わしていました。しかし、彼は1931(昭和6)年の満州事変に始まる日本軍部の東アジアでの動きを支持。朝河に対する書簡でもその意思を強く示すようになっていきます。年上の恩人に対し、朝河は丁重に、しかし非常に厳しい怒りをもって諫言しました。

当館ではこの他にも、太平洋戦争開戦阻止のために朝河が起草した「昭和天皇宛大統領親書草案」等、貴重資料を多数保存しており、電子画像で気軽にご覧いただけます。また、朝河に関する展示セットの貸出も行っておりますのでぜひご利用ください。

【写真転載元(朝河を除く): 国立国会図書館「近代日本人の肖像」】
(地域資料チーム 阿部誠)

平成 30 年度「ふくしまを知る連続講座」 実施報告

当館では県民の皆様の文化振興に寄与するため、「ふくしまを知る連続講座」を実施しています。ここでは今年度開催したものを簡単に紹介します。

第 1 回 「磐梯山の噴火から 130 年～世界の岩なだれの中の磐梯山～」

講師：佐藤 公 氏（磐梯山噴火記念館館長）

開催日：平成 30 年 4 月 22 日（日）14：00～15：30 参加人数：60 名

甚大な被害をもたらした磐梯山の噴火。発生したのは 1888（明治 21）年であり、2018 年は 130 年という節目の年にあたります。磐梯山の噴火がこれほどまでに大きな被害をもたらした理由の一つに「岩なだれ」があります。

今回の講座では噴火による岩なだれがもたらす被害についてご講演いただきました。磐梯山の他にもセントヘレズをはじめとする世界の火山で発生した岩なだれについて解説していただいたほか、吾妻山、安達太良山など近隣に存在する火山の噴火史や防災についてもお話していただきました。

※この講座に関連し、平成 30 年 9 月 7 日（金）～10 月 3 日（水）にかけて、当館展示スペースにて「磐梯山噴火記念館連携展示 世界の岩なだれ展～セントヘレズと磐梯山を中心に～」を開催いたしました。

第 2 回 「被災地の文化財 双葉高校史学部の軌跡」

講師：吉野 高光 氏（双葉町教育委員会）

開催日：平成 30 年 5 月 13 日（日）14：00～15：30 参加人数：23 名

福島県立双葉高等学校史学部は、昭和 22 年の発足以降、近隣地域の遺跡発掘調査に参加するなど、浜通りの地域史研究に大きく貢献してきました。史学部が行った遺跡の調査が『福島県史』の遺跡地名表などに反映されたほどです。また、同校史学部は「部誌」の発行も積極的に行っていました。民話の聞き取り調査や相馬藩城下町調査、空襲被害調査などの成果は『社研』・『双葉史学』に発表され、貴重な資料となっています。

双葉高校は原発事故の影響に伴う避難指示地域にあるため、平成 29 年 3 月末をもって休校を余儀なくされています。優れた活動を行ってきた史学部の歴史や、資料をはじめとする原発被災地の文化財をどのようにして受け継いでいくべきか、講演していただきました。

※この講座は平成 30 年 5 月 3 日（木）～6 月 6 日（水）に当館展示スペースにて開催された「まほろん移動展 被災地の文化財 双葉高校史学部の歩み」の関連事業です。

第3回 「県南の戊辰戦争 ～白河を中心に～」

講師：内野 豊大 氏（白河市文化財課 専門学芸員）

開催日：平成30年10月6日（土）14：00～15：30 参加人数：61名

東北諸藩と新政府軍との間で、白河やその周辺地域をめぐる繰り広げられた「白河口の戦い」は、約100日間に及ぶ戦いの中で、1000人以上もの死傷者を出したと言われています。このような戦いがどのように始まり、そしてどのように終わったのか。当時の庶民が書き記した手記や日記、手紙等は、混乱する当時の白河の様子を鮮明に浮かび上がらせます。

戦場となった白河を中心に、両軍側から見た当時の戦いの様子について白河市が作製した映像を見ながら解説していただきました。

第4回 「福島戊辰戦争 ～大藩の狭間で揺れ動く小藩の悲哀～」

講師：守谷 早苗 氏

開催日：平成30年10月21日（日）14：00～15：30 参加人数：57名

戊辰戦争が始まった当時は、一貫して勤王という立場をとっていた福島藩でしたが、会津藩を始めとする近隣の佐幕派藩の影響もあり、徐々に戊辰戦争の波にのまれていきます。

今回の講座では、戊辰戦争が始まった全国的な背景と、福島藩のほかに天童藩・下手渡藩・新発田藩などの近隣の小藩が、それぞれどのような「義」を掲げて戊辰戦争を戦ったのか、当時の藩の様子などを詳細な資料とともに講演していただきました。



※上記2講座に関連し、平成30年10月5日(金)～10月31日(水)にかけて企画展示「幕末の風～戊辰150年～」を開催いたしました。

第5回 「士（さむらい）たちの戊辰戦争」

講師：山田 英明 氏（(公財)福島県文化振興財団 専門学芸員）

開催日：平成30年11月25日（日）14：00～15：30 参加人数：94名

士（さむらい）たちにとって「戊辰戦争」はどのような意味を持っていたのでしょうか。戊辰戦争を経験した士のその後を追っていくと、それぞれの士たちの「生きざま」や、大義が見えてきます。

近世から戊辰戦争を経て近代に至るまで士（さむらい）の役割がどのように変わっていたのか。そして士たちの戦後について史料を読み解きながら、複眼で歴史を見ることの大切さも併せて解説していただきました。



※この講座は平成30年11月2日(金)～12月5日(水)にかけて当館展示スペースにて開催された「福島県歴史資料館移動展示 『村人たちの戊辰戦争』」の関連事業です。

(地域資料チーム 高橋 真希)

「明治五年飯坂湯野十綱渡架橋発起記録」

飯坂温泉駅に降り立ち右手に見える十綱橋は、温泉街のシンボリック的存在です。

古くは、『東鑑』に‘藤の十綱’と著されましたが、大鳥城主佐藤基治が1189(文治5)年の奥州合戦の折、防備のため橋を切落とし、以来渡しになったとも伝えられており、古来より摺上川兩岸に位置する伊達郡湯野村と対岸の信夫郡上飯坂村を結ぶ要所であったことがうかがえます①)。また、陸奥国の歌枕としても有名であり藤原親隆が、

みちのくの十綱の橋にくる綱のたえずも人にいひわたるかな (千載和歌集) ②③)

と詠んだ和歌がよく知られています。十綱の橋で手繰る綱のように絶えることなくという意味合いで、長い求愛の年月を詠嘆しています。

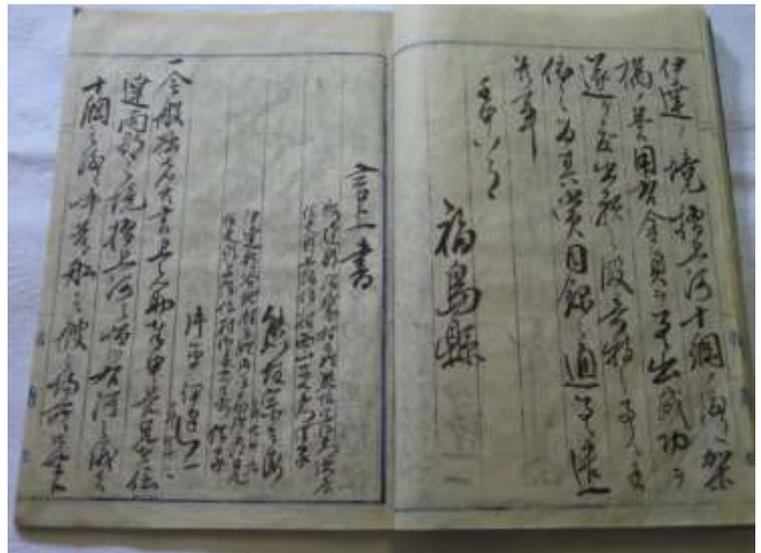
信夫伊達の地誌として馴染深い『信達一統志』[1841(天保12)年] ④)によると、「上飯坂^{ワタシ}邸」に‘十綱津’の項があり「邸の東信達の境所謂摺上川なり 古ハ綱十筋を兩岸に引張 小木を綱の上にならば繋ぎ橋となす 故に十綱の橋と云う 後世ハ津頭^{ツナワタシ}となす 故に渡綱津^{トツナワタシ}と云えり 十と渡と其音似たればなり」とあり、今から300年ほど前の『上飯坂村絵図』⑤)などには、‘十綱の渡し’が描かれており渡し舟があったことが知られています①④⑥⑦)。

この度、当館所蔵の10丁ほどの『明治五年飯坂湯野十綱渡架橋発起記録』をデジタル化することにあわせ、1873(明治6)年に実現した架橋について書かれた関係資料を調査しました。

冊子に‘福島縣’の文字が罫紙にあることから県庁文書の写しなどの一部ではないかと考えられます。四つ目袋綴りの装丁で、青い表紙と裏表紙にはそれぞれ3個の浮印があり‘若松愛沇堂梓’‘会津風土記’‘〇〇〇局編〇〇’と見えます。この冊子はおもともと3つの独立した文書だったものが、装丁される段階で1冊になったのではないかと思われ、題箋は後付けの気配を感じます。



『明治五年飯坂湯野十綱渡架橋発起記録』表紙



『同左』4丁裏~5丁表

さて本題は、この流麗な筆遣いの冊子に何が書かれているかです。

1～2丁は、1872(明治5)年8月に県令安場保和が大蔵大輔井上馨に送った届書の写しで、内容は、福島県が架橋に尽力した熊坂宗兵衛・片平伊達一を褒賞したことを政府に報告したものです。熊坂は79歳という「老衰」、片平は「盲目」という境遇にありながら、年来の積金を寄附して運輸往来の便を図ったことは「奇特」であるため、「人心振起開化之機」を失わないように賞与を与えたことを報告したものです(⑧⑨)。同一の内容が記されてある『県申牒外五件』(明治5-6年)は、「福島県庁文書」F295に収録されており福島県歴史資料館に収蔵されています。この冊子には井上からの指示が朱字で書き込まれています。

3～4丁は、同年8月に福島県が熊坂・片平に送った文書の控え二通で、両名の行いを賞詞し、褒賞して目録を贈呈しています。日付や目録の品が何であったのかは記されていません(⑧⑨⑩)。

5～6丁は、1872(明治5)年7月に熊坂・片平が福島県に宛てた建言書の写し。書かれた年月日の順に並べるなら、一番最初に来るものです。熊坂・片平両人が、摺上川の十綱の渡しに架橋を願い、戸長に提出し県庁へ回付されたものです。内容は、十綱の渡しが洪水によって牛馬の交通や商人の荷物に被害を与えたり、川の両村の往来に支障を来すために架橋を願い、架橋の資金として両人が商いや針按摩で貯めた百五十円を寄附するので、これが架橋の契機となって有志が続くであろうという趣旨が読みとれます(⑧⑨⑩)。

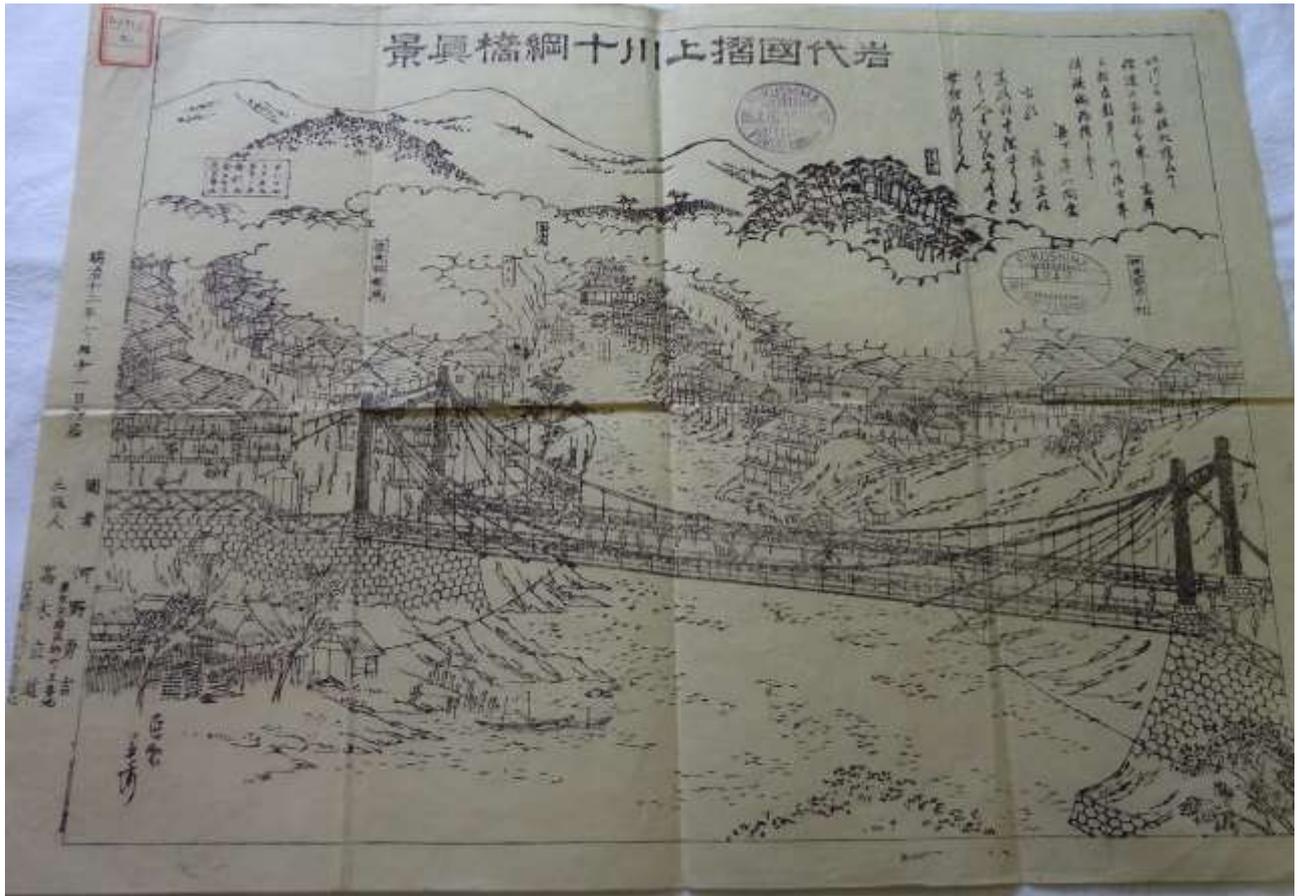
福島市史編纂委員を務め郷土史研究家の秋山政一氏は、「飯坂温泉「十綱橋」について」(⑩)の中で、旧湯野役場文書『村政略史』(⑪)に書かれた一文「明治五年県令安場安和県内巡視中誤って傷痕を受け、治療のため穴原温泉島清作方に逗留、按摩業盲人伊達一なる者、親しく地方状況を聴取あり」を示し、伊達一との出会いが、はからずも摺上川架橋という出来事の発端になったと書いています。

また、所蔵する関係資料の中に大正初期に刊行された『湯野温泉』(⑫)にも、「十綱橋の由来」の章には熊坂宗兵衛と盲人伊達市[一]、安場保和の出会いや歴史などが丁寧に書かれています。

1873(明治6)年12月竣工、不便な渡し舟から橋に替わり人々の喜びはいかばかりだったろうかと思われませんが、翌年9月に突然落橋。その翌々年には県費による架け替えが行われ10本の鉄線で支えられた木製吊橋「十綱橋」が架けられました。次ページの写真は、この1875(明治8)年5月に架けられた橋を模写した『岩代国摺上川十綱橋真景』(⑬)で当時の雰囲気を与えています。1915(大正4)年には、鋼アーチ橋「十綱橋」が完成します。

なお、後年に語られる片平伊達一の人柱説などの伝承については、野地一二氏の「飯坂十綱架橋筆頭発起人熊坂惣兵衛と県庁文書」(⑧)、前掲秋山氏の「飯坂温泉「十綱橋」について」(⑩)に詳しく書かれています。

この度の原書の解読と読み下し、解釈などについて福島県歴史資料館学芸員にご指導をいただいたこと深く感謝申し上げます。
(地域資料チーム 菅野由美)



『岩代国摺上川十綱橋真景』(⑬)

二代目の明治8年5月に完成の木製吊橋十綱橋を模写した資料(福島県立図書館所蔵)

参考文献

- ①『日本歴史地名大系』第7巻 福島県の地名 平凡社 1993
- ②『新日本古典文学大系』10 千載和歌集 岩波書店 1993
- ③『訂正増補信達二郡村誌』巻之三 仙台 香雲精舎 明治33(1900) 18丁表より上飯坂村 26裏-27丁表に十綱橋あり
- ④『信達一統志』巻之七 志田正徳/撰 自館複製 ルビはママ
元の出版事項:〔出版地不明〕志田正徳〔天保12(1841) 原本:福島大学教育学部図書館所蔵
- ⑤当館には所蔵なし。⑥に写真の掲載あり
- ⑥『飯坂のシンボル 十綱橋』十綱橋百年記念事業実行委員会/編・発行 [2016]
- ⑦『福島市史』第1巻 原始・古代・中世(通史編1) 福島市史編纂委員会/編・刊 1970
- ⑧「飯坂十綱架橋筆頭発起人熊坂惣兵衛と県庁文書」野地一二/著
『福島史学研究』福島県史学会 第49号 1987 p.33-56
- ⑨『安場保和伝 1835-99』安場保吉/編 藤原書店 2006
- ⑩「飯坂温泉「十綱橋」について」(上)(下)秋山政一/著
『福島史学研究』福島県史学会 復刊第21号(通巻第27) 1976 p.37-48,
及び復刊第22号(通巻第28) 1976 p.45-50
- ⑪「村政略史」
『福島県歴史資料館収蔵資料目録』第47集 福島県文化センター歴史資料課/ 福島県文化振興財団 2016 p.33
- ⑫『湯野温泉』新妻掬浪/著 大正5(1916) 「十綱橋の由来」の項あり p.21-32
- ⑬『岩代国摺上川十綱橋真景』河野勇吉/著 高木直道 上飯坂(福島県) 1879 33×46cm

福島県関係書誌の紹介・2018

このリストは、当館で所蔵する2018年1月から12月までに刊行された福島県関係の資料のなかで、1つの主題や人物について20以上の文献を紹介しているものを集めた書誌です。(一部の主題は20以下でも収録しています)

主題編と人物編に区分し、それぞれ主題、人名の50音順、発行年月順に配列しました。なお、主題は検索の便宜を優先して付けましたので、厳密な体系化は考慮していません。

2017年以前発行資料で、「福島県関係書誌の紹介・2017」に未収録のものも併せて集録しました。

特定の主題、人物についての文献リストとして活用していただければ幸いです。

凡例

主題

⇨関連主題

- ・(掲載数) 項目
「論文名」 編著者 『資料名』 編著者
出版者 発行月 項目掲載頁
*備考

主題編

会津藩

- ・(23)参考文献
『りんご侍と呼ばれた開拓者』 森山祐吾／著 中西出版 3月 p63-64
- ・(28)主な参考文献
『幕末会津藩松平容保の慟哭』 鈴木荘一／著 勉誠出版 10月 p165-166

会津藩

⇨戊辰戦争

- ・(32)参考文献
「会津と長州」 飯沼一元／[著] 『会津史談 第92号』 4月 p54-56

吾妻山

- ・(102)文献
『吾妻山地域の地質』 古川竜太／[著] 産業技術総合研究所地質調査総合センター 8月 p69-71

飯舘村

- ・(25)参考文献・資料

『飯舘を掘る 天明の飢饉と福島原発』
佐藤昌明／著 現代書館 3月
p200-201

医学・医療

⇨太田総合病院

- ・(53)発表論文
『太田総合病院学術年報 第53号』 太田総合病院 9月 p26-39, 86

⇨福島県立医科大学

- ・福島県立医科大学業績 論文・著書・研究発表等
『福島県立医科大学業績集 平成28年』
福島県立医科大学附属学術情報センタ
ー 3月 p1-660

御田植祭

- ・(73)参考文献・引用文献, 参考史料・引用史料
『会津の御田植祭』 会津の御田植祭調査委員会／編・刊 3月 p265-266

からむし

- ・(422)参考文献
『別冊 会津学 vol.1 暮らしと繊維植物』 会津学研究会 11月
p271-283

看護学

⇨福島県立医科大学

- ・(58)業績一覧 (2017年1月~12月)
『福島県立医科大学看護学部紀要 第20号』 福島県立医科大学看護学部 3月 p37-46
*業績一覧から著書や論文の数を掲出

喜多方市

- ・(26)引用・参考文献
『市内遺跡発掘調査報告書 平成29年度』 (喜多方市文化財調査報告書 第25集) 福島県喜多方市教育委員会 3月 p94
- ・(61)参考・引用文献
『喜多方 人々の心に響くまち』 歴史春秋出版 2017年10月 p250-251

行政資料

- ・(813)

『福島県立図書館所蔵 県内行政機関
発行資料一覧 (平成 29 年 1 月～12 月
受入)』 福島県立図書館資料情報サー
ビス部地域資料チーム 3 月 p3-22

建築

⇔会津

- ・(88)参考文献

『匠のふるさと会津 技と祈りの建築
文化誌』 福島県立博物館／編・刊 4
月 p76-77

考古学

- ・(139)平成 28 年度 福島県考古学関係文献
目録

『福島考古 第 59 号』 福島県考古学
会 2017 年 11 月 p140-146

雑誌

⇔はにや

- ・はにや・創刊から終刊までの目次

『はにや 第 20 号』 はにや会 2017
年 12 月 p56-61

下手渡藩

- ・(50)参考文献

『三池藩<下手渡藩>』(シリーズ藩物語)
林洋海／著 現代書館 6 月 p206

白河踊り

- ・(30)参考文献

『白河踊り 奥州白河からふるさとへ
伝えた盆踊り』 中原正男／著 書肆侃
侃房 2017 年 12 月 p157

白河市

⇔戊辰戦争

- ・(81)主要参考文献

『特別企画展 戊辰戦争と白河』 白河
市歴史民俗資料館／編・刊 8 月 p69

白河藩

⇔戊辰戦争

- ・(44)参考文献

『幕末維新史 幕末の白河藩 戊辰戦
争』 菊地正美／著・刊 5 月 巻末

心学

⇔会津藩

- ・(93)引用・参考文献

『中江藤樹の心学と会津・喜多方』 吉
田公平／著 研文出版 8 月
p255-260

書誌

- ・(12)

『書誌年鑑 2018』 有木太一／編 日
外アソシエーツ 12 月

*朝河貫一(p7),芦名氏(福島県)(p9),今
井照(p34),喜多方市(p109),福島県
(p412-413),福島第一原子力発電所事故
(p413),保科正之(p441)の書誌が掲載。

新聞記事

⇔福島市

- ・(286)資料目録

『福島市史資料叢書 第 101 輯 新聞資料
集成—平成の福島 5』 福島市史編纂委
員会／編 福島市教育委員会 3 月
p287-301

蔵書目録

- ・塩澤市松旧蔵図書・資料・著作目録

『塩澤市松旧蔵図書・資料・著作目録』
塩澤市松／著 2017 年 10 月

- ・(427)購入図書一覧(平成 29 年度),寄贈図
書一覧(平成 29 年度)

『福島県議会資料 議会資料 平成 30
年 2 月～3 月号』 福島県議会事務局政
務調査課 4 月 p186-199

大学

⇔福島大学

- ・(26)業績一覧

『行政社会論集 第 30 巻第 4 号』 福
島大学行政社会学会 3 月 p107-110
*業績一覧から著書や論文の数を掲出

- ・(36)編集後記

『商学論集 第 86 巻第 4 号』 福島大
学経済学会 3 月 p63-68
*編集後記から著書や論文の数を掲出

⇔いわき短期大学

- ・(17)研究活動報告

『いわき短期大学研究紀要 第 51 号』
いわき短期大学 3 月 p185-193

*研究活動報告から著書や論文の数を
掲出

団子山古墳・塚前古墳

- ・(53)引用・参考文献

『団子山古墳5 塚前古墳1』(福島大学考古学研究報告 第11集) 福島大学行政政策学類考古学研究室/[編]・刊 3月 p61-62

天王山遺跡

- ・(36)主な参考文献

『白河市天王山遺跡の時代』福島県文化財センター白河館/[編]・刊 9月 p[53]

斗南藩

⇔会津藩

- ・(57)参考文献

『斗南藩』(中公新書) 星亮一/著 中央公論新社 7月 p228-231

日本酪農講習所

- ・(66)主な参考文献

『日本酪農講習所は梁山泊だった』庄司一幸/著・刊 5月 p123

東日本大震災

- ・(46)文献

『東日本大震災の広域・複合災害による福島県民の健康問題に関する文献検討』草野つぎ/[著] [日本地域看護学会] 2017年12月 p23-25

- ・(32)参考文献

「序章 福島復興支援学の基本問題」山川充夫/著 『福島復興学』八朔社 2月 p24-25

- ・(54)参考文献

『守り抜いた医の灯 公立相馬総合病院の奇跡』福永久典/著 河北新報出版センター 2017年6月 p168-173

⇔果樹

- ・(31)引用文献

「東日本大震災が福島県産果樹にもたらした影響」半杭真一/著 『農 英知と進歩 No.297』 1月 p84-86

⇔農業

- ・(20)文献

「東日本大震災に対する地域のレジリアンス 福島県二本松市東和町の有機

農業とコミュニティを例に」石原英樹/[著] 『環境社会学研究 第22号』 2017年2月 p81

被差別部落

- ・(36)参考史料/参考文献

「福島」大内寛隆/著 『東日本の部落史 2』現代書館 1月 p135-136

福島県

- ・(1547) 福島県

『地名でたどる郷土の歴史 地方史誌にとりあげられた地名文献目録』飯澤文夫/監修 日外アソシエーツ 2017年12月 p137-164

福島第一原子力発電所事故

- ・(64)参考文献

「第3章「原発避難」をめぐる問題の諸相と課題」山本薫子/著 『原発震災と避難』有斐閣 2017年12月 p89-92

- ・(53)参考文献

「第4章 避難指示区域からの原発被災者における生活再建とその課題」高木竜輔/著 『原発震災と避難』有斐閣 2017年12月 p129-131

- ・(29)参考文献

「第5章 避難自治体の再建」今井照/著 『原発震災と避難』有斐閣 2017年12月 p161-162

- ・(28)参考文献

「終章 福島原発震災から何を学ぶのか」長谷川公一/著 『原発震災と避難』有斐閣 2017年12月 p273-274

- ・(605)参考文献一覧

『詳説福島原発・伊方原発年表』澤正宏/編著 クロスカルチャー出版 2月 p475-489

- ・(24)文献

「第7章 福島原発事故における被害者の分断」除本理史/[著] 『放射能汚染はなぜくりかえされるのか』東信堂 3月 p171-172

- ・(27)参考文献

「第7章 原発震災とメディア環境」
西兼志／著 『原発震災のテレビアーカイブ』 法政大学出版局 3月
p256-257

・(26)参考文献

「第1章 原発避難いじめの実態と構造的暴力」 辻内琢也／著 『福島原発事故 取り残される避難者』 明石書店 3月 p55-57

・(41)引用文献

「緊急事態への組織の対応」 小久保みどり／著 『日本における原子力発電のあゆみとフクシマ』 晃洋書房 2月
p193-195

・(134)参考文献

『経済学にとって公共性とはなにか』
小坂直人／著 日本経済評論社 2013年6月 p237-242

⇨自主避難

・(22)文献

「大惨事と自主的判断」 堀川直子／著 『震災後の地域文化と被災者の民俗誌』 1月 新泉社 p249-251

・(24)文献

「終章 市民が抱く不安の合理性」 除本理史／[著] 『放射能汚染はなぜくりかえされるのか』 東信堂 3月
p192-193

⇨除染

・(27)参考文献

「「除染の完了」後における除染に関する課題」 川崎興太／著 『環境復興』 八朔社 5月 p90-91

・(213)参考文献

『福島の除染と復興』 川崎興太／著 丸善 8月
*各章末の参考文献を合算

⇨避難

・(26)参考文献

「原発事故避難をめぐる“復興”と“再生”の時間」 関礼子／著 『被災と避難の社会学』 東信堂 2月 p97-98

・(120)参考文献

『原発事故後の子ども保養支援』 疋田香澄／著 人文書院 8月 p262-268

⇨文学

・(174)参考文献一覧

『原発文学史・論』 黒古一夫／著 社会評論社 6月 p285-291

⇨メンタルヘルス

・(185)文献・参考文献・引用文献

『福島原発事故がもたらしたものの』 前田正治／編著 誠信書房 6月
*各章末の参考文献を合算

戊辰戦争

・(182)主要参考文献

『戊辰戦争一五〇年』 福島県立博物館 [ほか]／編・刊 7月 p197-198

・(26)参考文献

『維新再考』 半藤一利／著 福島民友新聞社 9月 p268-269

⇨会津藩

・(35)主要参考文献

『戊辰明治150年 会津人と長州人かく語りき』 早川廣中／著 ラピュータ 8月 p139

埋蔵文化財

・(220)引用・参考文献

『発掘ふくしま 4』 福島県立博物館／編・刊 2017年10月 p89-90

南相馬市

⇨民俗

・(47)引用・参考文献一覧

『町場と里の民俗 ～小高町を中心に～』 南相馬市教育委員会事務局文化財課市史編さん係／編 南相馬市 3月 p96

民家

・(21)参考文献

「日本の民家からみた福島県の民家」 津山正幹／[述] 『福島の民俗 第46号』 福島県民俗学会 3月 p14-15

文書目録

・(1276)

『福島県歴史資料館収蔵資料目録 第49集 県内諸家寄託文書 佐久間成章家文

書 [ほか]』 福島県文化センター歴史資料課／編 福島県文化振興財団 3月 85p

⇨福島市

- ・(726)浅川 斎藤俊夫家文書目録
『福島市史資料叢書 第100輯 浅川 斎藤俊夫家文書』 福島市史編纂委員会／編 福島市教育委員会 3月 p159-190

⇨郡山市

- ・(991)
『郡山市歴史資料館収蔵資料目録 第32集 斎藤家文書』 郡山市歴史資料館／編 郡山市 3月 40p

⇨会津坂下町

- ・(2220)
『福島県会津坂下町史資料目録 第9集 赤田京子家文書 [ほか]』 会津坂下町史編さん室／編 会津坂下町史編さん委員会 3月 245p

⇨石川町

- ・(1872)
『福島県石川町史資料目録 第14集 渡辺実氏収集文書』 石川町教育委員会／編 石川町 3月 135p

民俗芸能

- ・(21)文献
「福島県の民俗芸能と減災無形文化遺産」 高倉浩樹／著 『震災後の地域文化と被災者の民俗誌』 1月 新泉社 p145-146

昔話

- ・(27)主な参考図書
『しのぶ・あだたらのむかしばなし』 麦わらぼうしの会／著 歴史春秋出版 7月 p255

梁川城

- ・(75)引用・参考文献
『梁川城跡 総合調査報告書』 伊達市教育委員会／編・刊 3月 p166-167

歴史

- ・(52)福島県

『地方史文献年鑑 2016 郷土史研究雑誌目次総覧 20』 飯澤文夫／編 岩田書院 2017年10月 p59-68

・(52)福島県

『地方史文献年鑑 2017 郷土史研究雑誌目次総覧 21』 飯澤文夫／編 岩田書院 10月 p61-70

人物編

岩本忠夫

- ・(117)文献リスト
『フクシマ・抵抗者たちの近現代史』 柴田哲雄／著 彩流社 2月 p220-228

小田健二

- ・(23)研究業績
『福島大学小田研究室のあゆみ』 阿部武／編著・刊 5月 p1-6

日下部善己

- ・(144)著作目録
『ふるさと福島の世界と文化』 日下部善己／著 歴史春秋出版 2月 p346-361

久保猪之吉

- ・(123)参考文献
『評伝耳鼻咽喉科のパイオニア久保猪之吉』 柴田浩一／著 梓書院 9月 p[228-233]

熊阪台州

- ・(48)参考文献
「熊阪台州著『信達歌』に詠む「宝帯(下紐)の関」を探る」 高橋信一／[著] 『福島史学研究 第96号』 3月 p74-76

佐藤浩

- ・(37)参考文献
『あなたはさとうひろしという一編の詩でした』 横山静恵・鶴賀イチ／[著] 歴史春秋出版 12月 p209-210

鈴木安蔵

- ・(117)文献リスト

『フクシマ・抵抗者たちの近現代史』
柴田哲雄／著 彩流社 2月
p220-228

秩父宮勢津子

- ・(29)主な参考文献
『会津松平容保公御孫姫 秩父宮妃勢
津子さま』 伊藤善創／著 福島民報社
1月 p178-180

千葉悦子

- ・(176)主要業績
「千葉悦子教授の略歴及び業績目録」
『行政社会論集 第30巻第4号』 3
月 p1-21

伝記集

⇔会津藩

- ・(30)主な参考文献
『会津人探究』 笠井尚／著 ラピュー
タ 8月 p228-229

長沢節

- ・(25)長沢節主要作品集
『長沢節』 内田静枝／編 河出書房新
社 2017年3月 p155

中山義秀

- ・(24)主な参考文献
『中山義秀、絶望のなかのキリスト』
庄司一幸／著・刊 10月 p65

半谷清寿

- ・(117)文献リスト
『フクシマ・抵抗者たちの近現代史』
柴田哲雄／著 彩流社 2月
p220-228

平田良衛

- ・(117)文献リスト
『フクシマ・抵抗者たちの近現代史』
柴田哲雄／著 彩流社 2月
p220-228

古川日出男

- ・(40)作品紹介
『「小説家」の二〇年「小説」の一〇〇
〇年』 古川日出男・佐々木敦／[共著]
P ヴァイン 9月 p388-396

保科正之

- ・(66)主要参考文献

『保科正之』 小池進／著 吉川弘文館
2017年11月 p303-307

松平容保

- ・(52)『葵の残葉』 主要参考文献
『葵の残葉』 奥山景布子／著 文芸春
秋 2017年12月 p [298-300]

吉野せい

- ・(45)吉野せい書誌
『吉野せい展 没後40周年』 いわき
市立草野心平記念文学館／編・刊 2017
年10月 p [16]

渡辺康芳

- ・(15)渡辺康芳氏の略歴及び主要研究業績
「渡辺康芳氏の略歴及び主要研究業績」
『郡山地方史研究 第47集』 郡山地
方史研究会 2017年3月 p2-3

(地域資料チーム 田中信乃)

=====
福島県郷土資料情報 No. 59

発行日：2019年3月7日

編集・発行：福島県立図書館
=====